

ふるさとルネサンス

第3号(二〇〇六年八月)

常陸国風土記の陰影

打田昇三

「此の世をばわが世とぞ思ふ…」と詠んで、その権勢を誇った藤原道長は八、九年前から病んでいた心臓病が万寿四年(一〇二七)の春から悪化し、夏には今で言う点滴だけで息をしている状態だった。

鴨川河畔の屋敷内に建立した寺院(法成寺)の阿弥陀堂を病室として、背中の腫瘍などに苦しみ続け十二月三日に死亡した。

死後は藤原氏累代の墓地に埋葬されたと伝えられるが現在は肝心の墓地が何処だか分からないらしい。まさに「栄華の夢」である。

藤原氏の始祖・鎌足は常陸国鹿島の出身という事になっているが、それを怪しむ説が多い。奈良時代に石岡で編纂された「常陸国風土記」は、鎌足の孫に当たる藤原宇合(ふじわらつまかい)が編纂責任者だった。

宇合は同族とされる太(おお)氏系の中臣一族の自慢話を、さり気なく常陸国風土記に取り入れている。風土記編纂の真の目的は、宇合の父・不比等(ふひと)による「藤原氏の箔付け」だとする説もある。

不比等自身は天智天皇の子らしい。養父の鎌足は朝廷から「藤原」の姓を賜っていたが、中

臣一族と言つのが怪しくて「帰化人説」もあり今一つ素性がハッキリしない。藤原氏の将来にとっては困ることである。

不比等は右大臣になり、法律の整備や国史の編纂などを所掌しつつ、娘を天皇家に送り込んで権力を握る「摂関政治」の布石を着々と打っていた。石岡を始め諸国に国分寺や国分尼寺を建立させた聖武天皇は、不比等と賀茂氏女との間に生まれた藤原宮子の子供であり、聖武皇后の光明子は、不比等と橘(梟犬養)三千代との間に生まれた娘である。

太安萬侶が「古事記」の編纂終了を朝廷に報告したのは和銅五年(七一三)一月二十八日と記録されている。それを手にした不比等は、別に編纂中の日本書紀との整合」を口実に古事記を公開しなかつたと推定される。

そして翌年の五月二日に諸国の国衙に命令を発し「風土記」を作成させることにした。勿論、石岡にも速達便を持った高級官僚が馬を乗り継ぎ、金丸通りから入ってきた。駅家にあつた鈴(鈴の宮の鈴)が鳴らされる。

実は、古事記の前に皇室の歴史などを記録した「天皇記」国記などが存在していたのだが、中大兄皇子(天智天皇)と藤原鎌足が共謀して蘇我王朝を倒したクーデターの際に焼失してしまった。日本の歴史は、その時点でセロになっ

たのである。勘繰れば意図的に焼いたのかも知れない。ところが、お節介な人物が焼け跡から燃え残りを拾ってきた。

「捨てる！」とも言えず、その史料の記録が伝えられることになり、古事記などの作成に役立つことになったのである。

古代日本の王権は、神話時代の崇神王朝のあとを応神大王(天皇)が継承拡大してから「継体天皇から天智天皇につながる系統」と、それに対立する形の「欽明天皇から蘇我一族(大王)に伝わる系統」があつたようだ。

「大化の改新」という美名に隠れたクーデターで天智「鎌足コンビが蘇我王朝から政権を奪つたあと、「壬申の乱」で天武天皇が天智系の弘文天皇を倒して権力を握った。

古事記の編纂を命じたのは天武天皇であるから天智系に倒された蘇我王朝の焼け残り史料は貴重であるが「大化の改新」以上の強硬手段で政権を手にした天武天皇には中途半端な古代の歴史は却って邪魔になる。

そこで「古事記」には、新興宗教の教範のように「教祖、つまり天武天皇中心の記事」を書くことが命令された。事務屋の太安萬侶は言われる俚に天武式記事を書いたようだが、同族ながら天智天皇の忘れ形見である藤原不比等はそういう訳にいかない。

焼け跡から出てきた歴史は、自分の実父と養父とが消そつとしたものであり、さらには古事記が天武天皇の功績でちりばめられるとしたら、そのような記録を出すことは二人の父親に申し

訳が立たない。

出来上がった古事記を不比等が嫌ったのはそういう理由であり、不比等の思惑は諸国から風土記」を出させ、その中から日本の歴史になる記事を抽出して日本書紀に入れようとしたのであると睨んでいる。

結局、天武天皇が死に、皇統が天武系から天智系に変わってきたため、折角、太安萬侶が作った「古事記」は不比等の命令で廃棄される運命にあった。

しかし太安萬侶にも意地がある。廃棄される本を一冊だけとって置いて一部をインターネットで流したらしい。不比等の思惑に反して古事記は残ることになった。ただ、安萬侶も権力者に睨まれては困るので、内容に少し手を入れた。時間が無いから適当にいじったので古事記は書かれていることが荒唐無稽、筋が一貫しない物語語になってしまった。

その頃、不比等の意向で常陸守になった三男の宇合は石岡に赴任していた。下総、上総、安房の按察使（あぜちし 視察官）を兼ねていたようだから、単なる国守ではない。

勤務先の庁舎は石岡小学校付近にあったが官舎はどの辺だったのだろうか。そこへ父から使りが来て「俺の遺言だと思って常陸風土記の中へ中臣氏の功績を記録しろ」と命じられた。そこで茨城の里に残る黒坂の命の土蜘蛛（山賊）退治伝説などの物語が、さり気なく挿入されることになった。

折り返し石岡から奈良へ「了解」の返信があ

って、すっかり安心した藤原不比等は養老四年（七二〇）八月三日に奈良市北部、大内裏（宮中）の近くにあった邸宅（現在の法華寺）で六十二歳の生涯を閉じた。死因は不明だが「不治の病」とある。時の朝廷は香典として近江の国（現在の滋賀県）全部を贈った。

不比等には、聖武天皇を生んだ宮子（文武天皇夫人）と光明皇后（孝謙天皇母）のほか蘇我一族の先妻との間に三人の男子、そして異母妹との間にも男子があった。

四人の男子が南家、北家、式家（宇合）、京家として藤原一族を形勢してゆくのであるが、最も栄えたのが次男・房前の北家で、他の三系統は途中から地方役人などに埋没定着してしまっただよつである。

「わが世の春」を謳歌した道長は、北家の祖である房前から数えて十代目に当たる。その間に同族、親子、兄弟の間で常に「骨肉相食む熾烈な争いを繰り返して、生き残って満月に至ったのが道長であった。

道長の死後、長男の頼道が関白太政大臣となり、宇治の平等院に鳳凰堂を建立して父親の供養を行い、子孫繁栄を祈ったが満月は欠けるのみ。効き目が無かったと見えて曾孫の忠通と頼長との仲が悪く、天皇家の相統争いとも絡んで「保元の乱（一一五六）」が起る。

保元の乱は皇室と藤原一門に服従していた武士団が歴史の主役になる最初の舞台である。その先陣をきって颯爽と登場したのが、石岡ゆか

りの平国香から数えて八代目の子孫にあたる平清盛その人なのである。

同じ頃、八幡太郎義家の孫で祖父の養子となつた源為義と、その息子の義朝も一方の武家の頭領として台頭してきた。両雄並び立たず、保元の乱に生き残つた者同士の勢力争い、特に後白河法皇に近侍する藤原信頼と藤原通憲との勢力争いに源義朝と平清盛の対立が絡んで「平治の乱」に発展した。

この合戦で源氏が敗れ、十三歳の源頼朝も捕まつて斬られるところを、清盛の継母である池の禪尼（藤原氏末流・宗兼の娘）の命乞いで救われることになる。

その頃、かつて桓武平氏の地盤だった関東一円は、前九年の役・後三年の役を境にして八幡太郎義家を頭領に仰いだ武将たちの子孫が平家から離れ源氏に従っていた。

平将門を討つた国香の嫡男・貞盛が常陸国を弟（後の大掾氏）に譲つて都を目指し近畿地方に土着したためである。平治の乱で源氏は滅亡し、一旦は東国も平氏の勢力下に入るが頼朝が伊豆で兵を挙げると、関東の平氏系武士団が真っ先に駆け付けて来た。

「驕る平家は久しからず」質実剛健の東国魂を忘れて藤原一族の柔弱な公家風に染まり切つた平家一族は、藤原氏や源氏のように同族が潰し合いをするでもなく簡単に西海に沈んでしまつた。尤も一代にして天下を手中にした平清盛を白河天皇（上皇）の子とする説もある。それならば致し方ない。

承平・天慶の乱で平将門に勝った平貞盛が、国香の後を継いで常陸国に留まり、その子孫が東国の覇者として君臨していたらばどうであろうか。恐らく都の朝廷も骨なし貴族も常に常陸国の顔色を窺うようになり藤原氏も「此の世がわが世」などとは言えなかった。日本の歴史は「平氏の都・石岡」を中心として動いていた筈である。

月曆(つきれき)観月 龍神山 鈴木真紀子

今年の夏は雨が多く、なかなか月も顔を出してはくれませんが、年々増している災害による各地の被害の大きさを知ると、本来的な意味で無事であることの有り難さを身に沁みて感じています。

睦月・如月・弥生と対応するのは本当は太陽曆の1月・2月・3月ではなくて月曆ですよね。月曆の7月は文月ですが、今年は珍しいことに文月が2回あります。

文月の閏です。7月25日が最初の文月1日、そして8月24日が閏文月の1日です。

太陽曆の陰でひっそりと、でも太古からのとつともない知恵を秘めて確かな時を紡いでいる月曆に、私はことのほかゆかしさを感じます。

今年は60日近くも文月があるのですから何か特別な意味が隠されているんでしょうね。それを調べてみるのも愉しみの一つです。

読売新聞の朝の小説 池澤夏樹さんの「光の指で触れよ」にも、18年に一度だけ或る場所で見られない月の動きの不思議さとストーンサークルの関係のことが書かれていました。森羅万象に美しい定理を発見した太古の人々が、日々の生業にあるいは祈りや感謝としてそれらの定理を取り込んで生きていた事実には畏敬の念を覚えます。

石岡の高台にあるお蕎麦屋さんの障子を開けると、そこからは月が望めます。

空の高みに月があるときはとても風情があります。でも、ひとたび稜線が目に入ると涙が出てしまいます。丁度お腹をえぐられたような生傷いっぱい山肌が目飛び込んでくるからです。

龍神山と神の名を冠した山の、無残な姿がそこにあるのです。心は痛みますがそれでも自然災害ならば仕方ありません。

でも人間のしたことです。残念ですが、そこに先人の知恵を私は見ません。

願いが叶うなら、採石をやめて欲しい。そして緑豊かな龍神山に戻して欲しい。えぐれたところが緑になれば、夫婦の龍神山となって石岡を守ってくれるかも知れません。

ふるさとルネサンス文庫
うちだしょうぞう「歴史物語」最新作

『天蚕天馬』 絹の道

(定価七〇〇円)

占いとふるさとルネサンス展 兼平智恵子

主人はソ連兵に銃を突きつけられながら義父の背中のリュックにのって奉天(瀋陽)から引き揚げてきました。

「あなたのお母さんは、自分の命を引き替えにあんたをこの世に送り出したんですよ。あなたは晩年に運が開けますよ」

占いのおばさんが真顔で言いました。

養母も病の多い主人に手古摺っていたようで、石岡に居住して間もなく四十度の原因不明の熱が一ヶ月あまり続き、その六年後にはひどい頭痛に三年間も襲われ、最後には藁をも継る思いで占いの治療となりました。

ところが占いのおばさんの言った通り、なるほど第二の人生の現在、新たな職場に順応し、楽しく仕事をしており、休日は筋力トレーニング三昧で益々の健康増進。以前の悪夢は何処かへ逃げ出してしまいました。このことから気良くした私は、大事のある度に占いの欄を横目にする事となりました。

七月十日から二十一日までNHK水戸放送局わいわいギャラリィで「ふるさとルネサンス展」が行われました。

ふるさとルネサンス展は「石岡周辺地域の歴史・文化を掘り起こし、未来への物語として伝承を与えていこう、石岡の町を元気にしよう」を掲げ、それぞれの持ち場での創作を発表するものでしたが、今回は特に私の担当する絵が中心となった作品展でしたから、私にとっての大

事の大事。

すわ、占い。迷わず星座占いを捲り助言を求め。しかも欲深く二箇所から。ちなみに私はうお座の女。

一ヶ所目：「今月は、一番自分にとって大切と思うことからやり始めましょう。あなたからのメッセージに多くの人が感動しそうです」

二ヶ所目：「中旬までは仕事が忙しく、困難な課題も抱えますが大きな成果をあげることができそう。ただし健康には気を配りましょう。娯楽・趣味などに記念に残る出来事が起こりそうです。対人関係も活発化」

果たして…

多くの皆さんの「高覧とそれぞれの大家の皆さんからのご支援、特に絵手紙の久保田光夫先生には色々のご配慮を頂き、感謝に堪えません。そして、私にとって思ってもみなかった記念に残る出来事も起こりました。

信じる者こそへ与えられる安定剤を支えに乗り切った十二日間でした。

わざわざ足をお運び頂いた多くの皆さん、NHK職員の皆さん、そしてふるさとルネサンスの友の皆さん本当にありがとうございました。今は心地よい達成感の余韻に浸っております。

『もうすぐ赤い陽さんさん』

さみだれ雲 今日まで威張ってる』

(七月二十四日)

ちちんぶいのぶい

小林幸枝

明け方のことでした。これまで感じたことの無い痛みに襲われた。

お腹：？ 背中：？ 脇腹：？ 痛みの発生している場所が特定できないのです。とにかくその辺りが錐で休み無く何箇所にもわたって突きまわされ、拷問を受けているような感じで、うめき声よりも脂汗が先に吹き出してきた。

痛みの場所や原因の思いつかないまま、ただひたすら我慢するだけ。あまりに痛みが過ぎると体のすべての動きが逆転するようで、胃の中だけでなく腸の中のものまでもが逆流し嘔吐してきます。

三時間ほど必死に我慢していたが、もう限界。病院に担ぎ込まれ、検査の結果、胆石症のことでした。

胆嚢の中に小指の爪ほどの大きさの石が五個あって、それが突然暴れたのだそうです。四十歳前後から五十歳くらいまでの女性には多いのだといわれた。治療の選択は手術しかないのだそうです。手術も、このまま騙し騙し様子を見ていよいよの時におこなう開腹手術か石のまだ小さい今、腹腔鏡手術で胆嚢を取ってしまうかだといわれました。どっちにしても手術なのだそうです。幸いというか胆管には石が無いから1時間半程度で済むのだともいわれた。

十一月には、つくばの劇場カピオでしゅわーど最初の舞台公演です。私の女優としての将来を占う大事です。爆弾を抱えて稽古を

も身に入らないと困ります。それで躊躇無く直ぐの手術を選択。

「腹腔鏡手術は殆ど痛みはないけど、お腹を切るのだから少しは痛いよ」

と外科の先生に言われた。つい一週間前にとんでもない、今まで感じたことの無い激痛にあったものだから、痛いという言葉に恐怖を覚えてしまいます。

そのことを演出家に話したら、

「そう、だったら私がちちんぶいのぶいをしてあげる」

と言われた。言われたといっても筆談ですが、そのときとても懐かしい思いがした。

私は、言葉の音としての響きは分からないけれど、文字にのって伝わってくる優しい響きは理解できる。そしてこれは、私が体感している響きでもあるように思った。

演出家は、今ではこんなお呪いを言う人はいないだろうけど、って言っていたけれど、もしかししたら私が子供だったころ、去年夏に亡くなったお婆さんが転んですりむいた膝っ小僧に薬を塗りながら、

「ちちんぶいのぶい。痛いの痛いの飛んでいけ」

とお呪いをしてくれたのかも知れません。それで演出家に、

「本当にしてくれますか」

と言ったら、首を縦に振って、「約束」の手話をしてくれた。この文が出るころには元気に退院しているはず。

その言葉は…

白井啓治

かつてこんな素晴らしい言葉が
あつただろうか
かつてこんな嬉しい言葉が
あつただろうか
かつてこんな楽しい言葉が
あつただろうか
かつてこんな喜びの言葉が
あつただろうか
かつてこんな寂しい言葉が
あつただろうか
かつてこんな哀しい言葉が
あつただろうか
かつてこんな悲しい言葉が
あつただろうか
かつてこんな愛しい言葉が
あつただろうか
かつてこんな激しい言葉が
あつただろうか
かつてこんな狂おしい言葉が
あつただろうか
かつてこんな怒りの言葉が
あつただろうか
かつてこんな苦しい言葉が
あつただろうか
かつてこんな不安な言葉が
あつただろうか

かつてこんな姑息な言葉が
あつただろうか

かつてこんな残酷な言葉が
あつただろうか

かつてこんな卑猥な言葉が
あつただろうか

かつてこんな憎しみの言葉が
あつただろうか

かつてこんな絶望の言葉が
あつただろうか

その言葉は…

「ありがとう」

「さようなら」

言葉は自由自在の夢と暴力

言葉には意味と感情がある。意味だけを考えると単純な定義で終わってしまうのだが、其処に感情が絡まってくると言葉は一気に無限大の広がりをもせる。

そこが言葉の面白いところである。一つの言葉に込められてある感情を思いつくまに並べてみるだけで詩になってしまうのだから。

意味を建前の定義とすれば、感情は定義できない複雑な本音・本質であるといえる。建前の定義は事象の説明には便利であるが、心を揺り動かす詩にはならない。しかし、言葉を感情として用いると、文芸的か否かは別にして一つの詩として紡ぎだしてくれる。

暮らした言葉をもっと豊かにと考えたとき、感情という本音・本質をもっと大切にしたいものである。

少し前のことになる。

ある大学の研究者からシナリオ作家宛てに女性言葉(「わ」「わよ」「わね」「かしら」等)の使用に関するアンケート依頼が送られてきた。その調査内容に思わず吹きだしてしまった。

(問い 日常的に女性言葉を使う女性のステレオタイプがあれば具体的に書いてください。例えば、三十代以上の山の手のお嬢さん育ち…)

学問としてのこれらの調査内容は馬鹿げているとは決して思わないが、我々脚本家は言葉をパターン化させて使うことはないのでお答えしようが無かった。

たぶんこの研究者は、言葉の意味と感情ということについて見落としていたのかも知れない。もしくはそれは承知で、もっと別の答えを引き出したかったのかもしれないが、アンケートを依頼するところを間違えたと思う。果たして何人の作家達が回答を寄せたのだろうか。

随分前のこと。某電機メーカーのソフトウェア研究所の所長が、幾つもの名画のシナリオの展開をコンピュータに入れ、面白くなりそうなストーリーを設定し、コンピュータに脚本を書かせたところ、詰まらない本になったといっていた。そして、芸術は人間がやるから芸術、とそう言いながら私に依頼した脚本に、暗にプレッシャーをくれたことがあった。

「ばあちゃん」の「喝！」 伊東弓子

ある施設に遊びに行ったときのことである。勢い込んで「おはよう！」と入っていった私の直ぐ後に車が止まり、三人の親子が降りてきた。二人の兄弟は「おはよう、ばあちゃん」と言いながら駆けてきた。私が「おはよう」と受け止めた瞬間、

「何してんの！ 走っちゃダメ！ 荷物を持って！ カバン！ 早く戻りなさい！ わかんないの！」

矢継ぎ早に怒鳴り声が聞こえてきた。朝から気分が悪くなった。子供の心や感情はどうなるの。

「喝！」

ある園で子供と一緒に昼食をとる楽しいひと時のこと。

「皆が揃うまでおつたを歌って待ってよつね。… どうしてお腹がへるのかな…」

歌い始めると三歳の子が、

「おつたダメだよ。うたっちゃダメだよ」

「なんで？」

「知らない。歌っちゃダメなの」

後で訳を聞くと「静かに待っているときに歌が聞こえてくると不快になる子もいるので、歌ったり、おしゃべりしないで待っているのです」と担任は答えてくれたが、そんなものなのだろうか。

またあるところのこと。

好き嫌いがあつて食事が進まない子、眠そうなお子、いろいろな形でぐずりだしてきた。

「我俣いうんじゃないの！」「全部食べないとおやつはあげない！」「もう、そうやってなさい！」「知らないから！」

そんな風にながみ言われた挙句、放り出されてしまふ。これで食べることの楽しさを覚えることができるのかな？

まだある。食後の待ち時間の長いこと。片付けが終わるまで子供たちは、横を向いちゃダメ、後ろを向いちゃダメ、イスをがたがたしてはダメ、ダメ、ダメ、ダメの連発。担任は食器の片付け、机拭き、床拭きと自分の仕事を早く終わらせることに躍起になっている。

なんとか決められた時間内に作業を終わらせると、自分達のティータイム。

「喝！」

子供たちが決められた課題にのつてこないこと

「さあ、お利口さんはやれるよね」

「おばかさんはいないかな？」

「しよがないう子は放っておきましょうね」

と自分達の都合の良い言葉で片付けてしまふ。嫌だよ！ と言える子、黙っている子、ぐずぐずしている子などみんな違って当然なのに、それを忘れて、

「じゃあいいわ。勝手にやっつてね。もう知らないから！」などと大人の強腰で押し切ったり、嫌味を言ったり、扉を乱暴に閉めたりして

しまふ。

子供たちはじつと聞いてます。見ています。

午後到庭で思い思いの遊具を手に遊んでいた。「お水ちょうだい」

水道の側にいた私のところに牛乳パックを持ってきた子に水を入れてやっていた。

「お水はダメ！ お昼寝すぎたらもうやらないって言ったよね！」

ヒステリックな声。何故、と聞いてみた。

「今夜は私が宿直当番なので、風邪をひいて熱でも出されたら困るのです」と言う返事が返ってきた。思わずかっとなり、血圧の急上昇の大声で、

「喝ッ〜ウ！」

と張りあげようとしたとき、

「ばあちゃんこの玩具、ばあちゃんが持ってきてくれたんだよね。ありがと」

といいながら肩に寄りかかってきた。この言葉のおかげで脳の血管が破裂しないですんだ。

公園で遊んでいた男の子が虫を見つけた。手でいじりはじめ、次に棒で突付きはじめた。少し離れたところにいた母親が、

「あー何？ わーッ、お母さん虫大嫌い。あんたその虫、毒持ってるんじゃないの。早く捨てなさい！ いじめちゃ可哀そうだよ。生き物は可愛がりましたよ」

と口先だけで思いつきにあれこれ言いながら、早く手放すように促していた。

「毒虫かどうか、お母さんが良く見て確かめることがお母さんの勉強ですよ」

老婆心でそう伝えたが、嫌味な婆さんと思っ
たかも知れない。

でも良いのです。

今の世、おばあさんの「喝」は必要なことな
のです。勿論、おじいさんの「喝」も。

大声がふるさとの自慢をつくる 近藤治平

悪口だって大声で言えば、言われたものにと
っては自慢の一つになる。反対にどんなに良い
ことであってもソコソコ言っていたのでは決して
自慢にはならない。

ふるさと自慢をつくりたい、ふるさと自慢
をしたいのであれば、どんなことでも良いから
大声を出して言おう

これが、我等「ふるさとルネサンス」の基本
姿勢である、と勝手に思っている。

七月十日から二十一日まで、NHK水戸放送
局のわいわいギャラリーでふるさとルネサンス
展が行われた。石岡からの来場者は少なかつた
が、土浦、鹿島、小美玉、日立などから大勢の
人が来てくれた。栃木県の方も来てくれた。

内田昇三さんの当番の日、同じような活動を
されている方が来られて「これだけのことが出
来るのは行政の後押しがあるのでしょうか」と
言われたのだそうだ。それに対して打田さんは

確りと大声で「ありません」とお答えしたそう
です。するとその方は「そうですか。やはり…」
と言われたそうです。「やはり…」とは何を意味
するかは小生が直接話したわけではないので感じ
取ることはできません。

もし、その場にいたのが私だったらどうお答
えしたでしょうか。たぶん、

「ありません。もし行政の後押しを貰ってい
たらこれだけの質の作品を創ることはできなか
ったでしょう。勿論数はもつと沢山あるでしょ
うが」

と答えたかもしれませんが。何たる高慢ちきな
態度であるかと思われるかもしれませんが、そ
れで良いのです。それでもし非難の声が出たら
それこそ石岡自慢が一つ生まれたことになりま
す。

ルネサンスの会の仲間、大声、大仰、オー
バーアクションを旨としてふるさとに自慢を創
造しているこうと集まった者たちだと小生は認識
しています。特に真実を語るときには大きく語
らなければならぬと思う。事実は重要である
が、その先にある真実を観ないで事実だけを語
ろうとする声小さくなる。

全く個人的な考えではあるが、事実にあまり
にこだわる人は、観察が卑屈になり表現が卑猥
になると思っている。これは目的と手段の關係
のようなものが見えなくなってしまうからだろ
うと思う。

目的と手段で思い出したが、八郷町と石岡市
が合併してまもなく一年になるが、その前の美

野里、玉里を含めた合併が詰まらぬ理由で流れ
たときのことである。石岡市議の弁であったと
思うが、合併は目的ではなく手段であることを
再確認し…、といった内容の印刷物が配布され
てきたが、大声で笑ってしまった。中身の全く
見えない目的を楯に合併は手段ときたものだ。
あんなことを書いて配るのならば、もつと大声
で平成の大合併こそ目的です、と言えば良いの
にと思ったものであった。

もし、あの時「合併こそが一大目的です！」
と大声を上げていれば、大したふるさと自慢に
なっただろうと思うが、へそ曲がりすぎるだ
ろうか。

石岡に越してきて間もない頃であった。風土
記の丘に案内されて、獅子頭を見せられた。そ
して、小声に「これ、こんなものじゃない、で
テレビに放映されたんですよ」と言われた。初
めて見て、成る程こんなものいらぬ、だなと
思ったのであるが、それをもつと大声で言えば
自慢になるのになと思つたものである。

ルネサンスの仲間達は面白い。兼平さんは石
岡はとつても良い所です、と大声に表現し、打
田さんは石岡の人はこう言っけれど、と大声し、
小生は悪口を専門に大声してみる。

色々なことを色々な形で大声しなければ、自
慢なんて自然発生的に生まれるものではないだ
ろう。そう固く信じて、一層の大声をあげて自
慢を創造しなくては、としみじみと大声で思っ
てみる。

今月のふるさとルネサンス

絵と一行文教室

八月四日(金)午後一時半～三時

八月一八日(金)午後一時半～三時

日々の暮らしの中に小さいけれど心を言ばせてくれた出来事、発見を自由律に一行の文に紡ぎ、色に染めて、自分を褒める。時には、思つ人に褒めた自分を葉書に刷いてお裾分けする。暖かく楽しい教室です。

朗読サイン舞教室

講師の都合により、八月は休講させていただきます。9月より、第二、第四金曜日午後七時より開講する予定です。

劇団「表現舎しゅわーど」アトリエ公演

八月は夏休みさせていただきます。

(お知らせ)

劇団「表現舎しゅわーど」では、朗読を演技手話に通訳する人を養成する教室を開くこととなりました。朗読にあわせての演技手話通訳をやってみたい人を募集しております。手話の経験・未経験は問いません。サイン舞俳優の小林幸枝が直接指導します。詳しくはカフェ・キーボー・表現舎しゅわーど(0299-231100)までお問い合わせください。

劇団「表現舎しゅわーど」研究生募集中

「表現舎しゅわーど」は、ふるさとに生まれた物語を「語り朗読にサインを基軸とした舞による朗読舞」と「語り朗読とサイン演技を一体化した朗読舞劇」を中心とした舞台表現活動を行なっているふるさとルネサンス劇団です。

表現舎しゅわーど・俳優塾では、研究生を募集しております。俳優にとって不可欠な演技表現の基本について、週一回のマン・ツー・マン授業で半年間学んでいただきます。詳しくは、下記までお問い合わせください。

カフェ・キーボー・ふるさとルネサンス(成田清和)

電話0299-23-1100

ふるさとルネサンス文庫

うちだしょうぞう作品

「悪僧記」「花は咲けども」「志筑八千五百石」「玉里村幻影」「石岡ふるさと再発見」「歴史なき歴史の里の歴史譚」「曾我兄弟と大塚氏」「蛇の神と耳の神」「戦乱」「夢彦物語」「まほろばの里」「古代の面影」「衰亡の谷」「天蚕天馬(絹の道)」「茨城の里」

近藤治平作品

「新鈴が池物語(新鈴が池物語・潮の道・霞ヶ浦の紅い鯨・金丸わはは通り)」「皇帝ペンギンの首飾り」「新説柏原池物語」「風に吹かれて一行に呟く」

兼平智恵子作品

「日々の移ろいのなかに」「ふるさとの風に呟いて(近藤治平共著)」

大湖千恵子作品

「鈴の宮のおたふくちゃん(鈴の宮のおたふくちゃん・龍神山恋物語・千代姫物語・丁子屋染物店に守られた母子)」

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 242063

(白井啓治)